

柳永の詞風と北宋都市生活

宇野直人

一 問題の所在

二 柳永の詞における〈女性〉

(1) 柳詞に見える女性像の特色

(2) 柳詞の女性像の類別

(3) 艶詞成立の社會的條件

——都市の中の女性

(4) 北宋士大夫と女性

三 柳永の詞における〈夜〉

(1) 柳詞に見える夜の情景とその先例

(2) 同時代の詩詞との比較

(3) 北宋都市における夜と〈通俗類書〉

(4) 小説史における夜と、柳永の夜の詞の小説的構想

四 結語

一 問題の所在

中國の都市社會は、北宋に入つて種々の變貌を遂げた。人口の増加に伴う居住區域の擴大と坊市制の崩壞、商工業の興隆と貨幣經濟の進展、新興市民層の擡頭と演藝場・社交場の繁昌等々。それは一口に言へば、城郭を象徴とする政治都市から、商業都市への變貌であつた。

た。このような動きが顯著になつたのは、仁宗朝中期（在位一〇二二—一〇六三）と見られるが、その時期が慢詞の確立者柳永（九八七—一〇五三）の活動時期とはば一致していることは、見逃し得ない意味をもつと言えよう。

柳永が當時の都市繁華街に出入して詞作を行つていたことについては、種々の詞話・筆記の類に、半ば詆毀の意をこめつつ言及されている。

○遊東都南北二巷、作新樂府（東都汴京、南北の二巷に遊び、新樂府（二詞）を作る）。〔北宋、陳師道『後山詩話』〕

○爲學子時多游狎邪、善爲歌辭（學子爲りし時、多く狎邪（繁華街）に遊び、善く歌辭を爲る）。〔南宋、葉夢得『石林避暑錄話』卷三〕

○日與猥子縱游娼館酒樓間、無復檢約（日、猥子（ひと癖ある仲間たち）と縱に娼館・酒樓の間に遊び、復た檢約すること無し）。〔南宋、胡仔『茗溪漁隱叢話』後集卷三十九引『藝苑雌黃』〕

このこと自體は柳永を扱う專論・專著でしばしば觸れられているが、しかしこの、言わば作品成立のための外的事情としての當時の都市の種々相が、柳永の詞の題材や手法に與えた影響の具體的様相、またその文學史的意義、といった問題についてはなお考究の餘地が残さ

れているように思われる。詞は、少なくとも當時にあつては、宴席など社交的・公的な場で、歌妓によって歌われる歌辭文藝としての性格を第一義的に存していた。したがって、柳永の詞が發表された「場」は、都市社會の特質、およびそこに集う享受者の層や精神生活のあり方は、柳永個人の文學觀や人間的個性にも増して、作品の内容を大きく規定する力を持っていたに違いない。

一方、當時の都市社會を蔽っていた氣風・思潮は、繁華街で行われていた諸演藝に如實に反映していた筈である。この分野については、孟元老『東京夢華錄』卷五〈京瓦伎藝〉に記述があり、『小唱・嘌唱・般雜劇・講史・小説・散樂・諸宮調・商謎・說書・合生・叫果子』などの名目が挙げられている。柳永の詞がこれらの演藝と、發表の場・享受者層を共有していたとなれば、柳永の詞風を考察するに當っては、それらの影響を考慮に入れることが必要かつ有用な手續となると言えよう。ただ遺憾ながら、柳永の詞と關係が深かったと思われる北宋期の講唱文藝の内容・形態については直接の資料が現存せず、後世になって整理・刊行されたものから間接的に類推するしか術が無い。それらの中で、特に詩や詞と縁が深いという點において、①元代以降に成立したと思われる〈小説〉の筆錄本Ⅱいわゆる〈話本〉、②〈小説〉人の種本（台本）集、の二系列の資料が注目される。これらと柳永の内容とを對照して、他に見られない獨特の共通性がそこにあるとすれば、その點を、柳永の特色を考察する足がかりとして生かすことが可能であらう。

- 本稿ではこの立場から、柳永のうち特に、
- (一) 女性を描いた作、
 - (二) 夜を舞台とした作、

の二種の作品群に着目し、それらの「都市の文學」としての特色、およびその特色をもたらしたる要因を考察し、併せて後續の詞に與えた影響についても言及したい。これらの諸作は、當時の都市繁華街の状況、市民の生活感情が柳永の詞風に及ぼした影響を最も端的な形で示していると共に、特に(二)の作品群に見られる柳永の創作姿勢は、慢詞という様式に潜在する表現の可能性の顯在化という側面を有し、その點で柳永の詞史上における位置を明確ならしめる意義をもつと察せられるのである。

二 柳永の詞における〈女性〉

(1) 柳永に見える女性像の特色

女性を詠じた柳永の詞——いわゆる「艷詞」については既に專論もあり、内容上の特色がいくつか明らかにされている。それは、

- ① 詩材としての女性像が、柳永に至って従来の觀念性・類型性を脱却し、心理の具體的描寫を主眼とするに至ったこと、

- ② 用語の面で特に口語的な語氣、語彙を多用して「語りの口調」と言うべきスタイルを開拓したこと、

の二點にはば集約されよう。そこでまず、これを再確認することから始めたい。①の特色を端的に示す例としては、女性自身の心情告白という設定における作風を見るのが順當であらう。

120 晝夜樂 其一（後闕のみ）

一場寂寞憑誰訴、しばし寄せ來るこのさびしさをだれに訴えよう
算前言 總輕負、思えば昔の約束は全部御破算になった
早知恁地難拚、こんなに未練が残ると初めから判っていたら
悔不當時留住、あのときしかと引きとめておくのだった

其奈風流端正外

更別有

繫人心處

一日不思量

也攢眉千度

口惜しいけれどもあのひとは

おしゃれで垢ぬけている上

私の心を虜にするものをもっている

せめて一日思ひまいとしても

私の眉はおのずと千回もひそめられてしまうのだ

062 鳳棲梧 其二 (後闕のみ)

擬把疏狂圖一醉

對酒當歌

強樂還無味

衣帶漸寬終不悔

爲伊消得人憔悴

羽目をはずしてさあ酔おう

酒を飲んだら歌わねば――

でもむりにはしゃぐとかえって味氣ない

着物の帯がゆるくなっても決して悔みはしない

伊のためにこそ私はやつれてゆくのだから

105 少年遊 其八

一生贏得是淒涼

追前事 暗心傷

萬種千般

把伊情分

顛倒儘猜量

私の生涯得たものはわびしただけ

過ぎたことを追いかけて人知れず心が痛む

何度も何度も繰返し

伊の心をあれこれと

私は推しはかる

同傾向の作としては、他に044「慢卷紉」、084「錦堂春」、085「定風波」

などを挙げることができる。作中の女主人公は、いずれも自己の世界に一途にのめりこみ、思いつめ、時に決然とした覺悟を披瀝している。右の062「鳳棲梧」の末二句について、王國維は「大いなる事業・

柳永の詞風と北宋都市生活

學問を成就する人物が必ず通過すべき三種の境界」の一種として挙げ

『人間詞話』第二十六條、また085「定風波」(自春來 慘綠愁紅)につい

て、楊海明は「新たな女性の生への願望を描いている」と評する(『唐

宋詞史』第四章第一節)。そうした評語を導き出すに足る一種の「強

さ」「重み」を、柳永の艶詞の表現は備えているわけであらう。

次に②の、用語面の特徴であるが、これについて口語の多用と共に

注目すべきは、柳永が詞の中で女性への好意を詠する場合、前代に類

例の乏しい角度からこれを行っていることである。

a 能染翰、千里寄 小詩長簡

〔彼女は達筆、千里のあなたから短い詩と長文の手紙をくれた〕

b 偏能傲 文人談笑 〔彼女は文學談義がとにかくお得意〕

c 屬和新詞多俊格 〔新しい歌詞に唱和を請えば、どれも才氣に富んだ出来ばえ〕

d 文談閒雅、歌喉清麗、舉措好精神 〔文學を語れば上品で格調高く、歌をうたえば清らかな美聲、物腰に表

れる氣つぷのよさ〕

e 星眸顧指精神、皓 〔星の瞳くるりとめぐらせば、氣性の強さが表れる〕

f 爲妙年、俊格聰明 〔彼女は年ごろ、機敏で利發〕

(102「少年遊」其五)

(113「木蘭花」其四)

(134「八六子」)

g 惡、發姿顔歡喜面 細追想處皆堪惜

〔怒った様子うれしい時の表情 思い返せばみないとおしい〕

(145)「滿江紅」其二

h 天然俏 自來妍黠 最奇絕

〔天與の美貌生れついでるがしこさは何より魅力的〕

(154)「小鎮西」

i 從來嬌縱多猜訝

〔むかしから 愛らしさあふれる女人はねたみ心が強いとか〕

(187)「洞仙歌」

これらの句において、賞賛に値する女性の條件は、外見の美よりもむしろ、(A)文學的・藝術的才能の豊かさ(a・b・c・d・f)、(B)氣性の強さ・快活さ(d・e・f・g・h・i)に置かれていると見なすことができる。

(2) 柳詞の女性像の類例

さて、この①②の特色は共に、從來の類似のテーマを扱った詩詞には見いだし難い内容である。①に見られる積極的で果敢な性格は、古樂府の「陌上桑」(日出東南隅)「木蘭詩」(唧唧復唧唧)、或いは李白の「東海有勇婦」(梁山感杞妻)「秦女休行」(西門秦氏女)など、民歌もしくはそれに擬した作品の中に稀に見られる程度であり、特に唐代、閨怨詩を中心に形成された靜止的・受動的な「待つ女性の美」とは正反對であると言えよう。

西宮秋怨

王昌齡

芙蓉不及美人粧 芙蓉も及ばず 美人の粧

水殿風來珠翠香 水殿 風來つて 珠翠香し

卻恨含情掩秋扇 卻つて恨む 情を含んで秋扇を掩ひ

空懸明月待君王 空しく明月を懸けて君王を待つを

怨情 李白

美人捲珠簾 美人 珠簾を捲き

深坐颦蛾眉 深坐して蛾眉を顰む

但見淚痕濕 但だ淚痕の濕ふを見る

不知心恨誰 知らず心に誰をか恨むる

また②の手法も斬新そのものであり、いま試みに既刊の歌詩索引類を検しても、女性をはめるのに「文談」「俊格」「精神峭」「聰明」「惡發」「妍黠」「猜訝」という語を用いた前例は(類義語をも含め)ほとんど全く見當らない。また、柳永への影響が指摘される敦煌曲子詞においても、右の①②の先蹤と呼ぶにふさわしい作例は見いだすことができない。

そのような女性像の類例を豊富に見いだすことができるのは、むしろ小説史の方面である。まず六朝の志怪小説に登場する女性については、その多くが情熱的・能動的な性格をもち、愛・嫉妬・裏切りなど多様な姿を見せていることが既に指摘されている。ここでは「陽羨書生」(梁・吳均撰「續齊諧記」所收)に現れる女性の奔放な發言のみ例示しよう。

此女謂彦曰、「雖與書生結妻、而實懷外心。向亦竊將一男子同來。書生既眠、暫喚之。願君勿言」(此の女彦に謂ひて曰く、「書生と結妻すと雖も、而れども實は外心を懷く。向に亦た竊かに一男子を將て同に來れり。書生既に眠れば、暫く之を喚ばん。願はくは君言ふこと勿れ」と)。

ついで唐代の傳奇小説にあつても、たとえば地方官の一人息子を援

護して科擧に合格させる妓女の物語「李娃傳」、夫を裏切り不倫に奔る才女歩飛烟の物語「飛烟傳」、主家の四兄弟から次々に言い寄られ、これを絶妙の機知によって一舉に解決する下女を主人公とする「却要」、さらには主人の難儀を救うべく男勝りの活動を展開する女性を描く「紅線傳」「聶隱娘」等々、その個性は多彩である。

このように積極的で果敢な女性像は、北宋の傳奇小説集『青瑣高議』や、南宋・元初に成立した小説『人種本集』『綠窗新話』『醉翁談錄』にも繼承されている。特に右に例示した唐代傳奇の内容が『綠窗新話』『醉翁談錄』に踏襲されていること(表一)、また、先の②(田)、すなわち女性の文學的・藝術的才能への言及が屢々見られることが注目されよう。たとえば――

表一

傳奇	『綠窗新話』	『醉翁談錄』
李娃傳	李娃使鄭子登科(卷下)	李亞仙不負鄭元和(癸集卷一「不負心類」) *李亞仙(甲集卷一「小説開闢」)
飛烟傳	趙象慕非烟擾秦(卷下)	
却要	却要燃燭照四子(卷下)	
紅線傳	薛嵩重紅線撥阮(卷下)	*紅線盜印(甲集卷一「小説開闢」)
聶隱娘		*西山聶隱娘(甲集卷一「小説開闢」)

*は、題目のみ示されているもの。

○嬌娘・善歌舞、學詩詞、談論端雅、儼然有君子之風(嬌娘：歌舞を善くし、詩詞を學び、談論端雅、儼然として君子の風有り)『青瑣高議』前集卷三「嬌娘行」

○楚兒……素爲三曲之尤。而辯慧、往往有詩句可稱(楚兒：素三曲の尤爲り。而うして辯慧、往往にして詩句の稱す可きもの有り)『綠窗新話』卷下「楚兒遭郭鍛鞭打」

○素姐年至十二、聰敏、無書不讀、善書算(素姐は年十二に至りて聰敏、書として讀まざる無く、書算を善くす)『醉翁談錄』丙集卷二「黃季仲不挾貴以易娶」

さらに時代を下り、いわゆる「話本」の中にもこの種の女性像は頻繁に現れる。科擧に落第した夫を詞によって何度も叱咤激勵し、ついに及第させる賢妻が登場する「簡貼和尚」、學問百般に習熟した上、辯舌が巧みで、事あるごとに相手をやりこめて周囲から辟易される女性を主人公とする「快嘴李翠蓮記」、淫奔な女性の一代記「刎頸鴛鴦會」(以上『清平山堂話本』)、或いは讀書算盤が得意で樂器も巧みに奏し、莫大な持參金を持ちながら「どうしても讀書人の所へ嫁入りしたい」と主張して多くの縁談を斷り續ける勝ち氣な娘が登場する「西山一窟鬼」(『京本通俗小説』卷十二)などはその好例である。

こうして見ると、志怪以來の小説史における「女性」の表現は、元代以降のいわゆる「話本」に至るまで一貫した方向性をもつと共に、柳永の艶詞に描かれた女性――自我の率直な表出、また「頭の良さ、氣性の強さ」に集約されるその個性と、極めて容易に結びつく。したがって柳永における文學的素材としての「女性」は、詩史よりも小説史の傳統の方にずっと接近していることになり、興味ある問題を提起していると言えよう。右に例示した資料の中で、柳永(一〇五八ごろ歿)

の時代に最も近いのは『青瑣高議』（十一世紀後半成立）であるが、この書に同様の女性像が見られる事實は、柳詞との關連を考える上で、次の二點において注目される。

① 本書は單なる小説集ではなく、後續の『綠窗新話』『醉翁談錄』と共に（通俗類書）の範疇に入るもので、演藝場で語られる（小説）の成立と不可分の關係にあると目せられていること。

② それら三書の中には、韻散混合の形て話を進めたり、或る詩詞の成立背景や内容を物語によって説明したりする、つまり（詩話）に類するものが多いが、それらは市民層にとって、詩詞鑑賞の手引書の役を果たしていたと考えられること。

この點によって、柳永の艶詞の取材源・制作姿勢について一つの推測を行うことができる。すなわち、柳永は北宋の都市繁華街にあって、今日すでに失われた（通俗類書）もしくはそれに類した種本に基づいて語られる（小説）に觸れ、そこに見られる、詩詞と物語とが相補的な關係にある文學の形態に順應する形で、それらの（小説）に類出する女性像を詞の中に取り入れ、再構成し、（小説）と同じ場において再呈示したのではなからうか。

この問題については次章でさらに別の觀點から追究したいが、ここでは艶詞の背景と意義についてももう少し考察を加える。前述のとおり、當時の詞が一人稱的抒情の具である以上に、發表の場・享受者の嗜好への深い配慮を要する様式であったことからして、柳永がこのような艶詞を多作した要因は、そのような作風を歓迎した當時の都市社會の狀況にも求めらるべきであらう。そこで次に、こうした「新しい女性像」の表現を受容する素地としての、北宋都市における女性のあり方の一斑を探ってみよう。

(3) 艶詞成立の社會的條件

——都市の中の女性

北宋都市における女性市民の生活形態の特色として第一に挙げられるのは、その職場進出の趨勢であらう。當時、各都市で衣服・食品・陶瓷器・紙など日常消費物の需要が激増したのに伴い、特に商業・手工業に従事する家庭において、女性が男性に伍して店舗の運営に攜る風潮が廣まり、中には女性經營者が采配を振る店舗も稀ではなかった。また、生産量増加・コスト抑制・品質向上を効率的に實現させるため、分業による専門化が促進され、種々の特殊化された作業のため、人手が廣汎に求められた結果として、女性の雇傭口が擴大されたことも指摘される。こうした女性の就業率の上昇と共に、都市の各家庭での食事を専ら飲食店から取り寄せる傾向や、女性が街中で遊興に耽る機會が増えたことについて、ここで觸れておくべきであらう。

○處處擁門、各有茶坊酒店、勾肆飲食。市井經紀之家、往往只於市店旋買飲食、不置家蔬（處處に門を擁し、各々茶坊・酒店・勾肆・飲食有り。市井の經紀の家（商賣によって生活する家）は往往にして只だ市店より旋買飲食し、家蔬を置かず）。〔東京夢華錄〕卷三（馬行街鋪席）

○舊曹門街北、山子茶坊、內有仙洞仙橋。仕女往往夜遊、喫茶於彼（舊の曹門街の北の山子茶坊は、内に仙洞・仙橋有り。仕女（良家の子女）往往にして夜遊び、茶を彼に喫す）。〔同書卷二（潘樓東街巷）〕

○向晚貴家婦女、縱賞關賭、入場觀看、入市店飲宴。慣習成風、不相笑訝（向晚、貴家の婦女は賞を縱にし賭に關し、場に入りて觀看し、市店に入りて飲宴す。慣習風と成り、相笑訝せず）。〔同書卷七（正月）〕

このような生活形態の變動が女性の意識や言動のあり方に影響し、

それがさらに講唱文藝の女性像にも影響したことは當然の趨勢だったのである。志怪以來の積極的・能動的な女性像は、この時期、市民層にとつてますます現實的な、身近なものとして語られ、享受されたものと思われる。そしてこのことが、柳永の艶詞の性格づけに對し、強力な觸媒として作用したと察せられよう。

(4) 北宋士大夫と女性

もつとも、そのような女性像はあくまでも都市の市民社會においてのみ歡迎されたものであり、士大夫の家庭および政治社會に及ぶものではなかった。

まず、當時の官僚士大夫は、家庭生活において、少なくとも建前上は、妻を完全に支配下に置くことが要求され、これを全うできない者は左遷の對象になるほどであった。

○賈翔言、「國子博士通判台州龔綬、治家無狀、不能制悍妻。準敕斷離、取笑朝列、不當親民」。詔徙監場務（賈翔言ふ、「國子博士通判台州龔綬は家を行むるに狀無く、悍妻を制する能はず。敕に準じて斷離（夫婦關係を斷絶すること）すれば、笑を朝列に取り、當に民に親しむべからず」と。詔して監場の務に従す。『續資治通鑑長編』卷六十五（眞宗景德四年（一〇〇七）六月己酉））

○度支員外郎知河中府勾克儉、妻悍戾、與豪家往還、因緣納賄。克儉不能禁。卒末、降克儉知寧州（度支員外郎・知河中府勾克儉、妻悍戾にして豪家と往還し、緣に因つて賄ひを納る。克儉禁する能はず。卒末、克儉を降して寧州に知たらしむ。『同書卷八十六（大中祥符九年（一〇一六）正月庚午））

また、彼らが官妓と個人的に親密になることも禁忌事項であつた。

○久之、或以爲私官妓。徙河中府、又徙杭州蘇州（久しくして或る

柳永の詞風と北宋都市生活

ひと（蔣堂を）以て官妓を私すと爲す。河中府に徙し、又杭州・蘇州に徙す。『宋史』卷二十九、蔣堂傳）

○渙領官并州、與營妓游、黜通判磁州。尋知遼州（渙領并州に官たりしとき、營妓（＝官妓）と遊び、黜けられて磁州に通判たり。尋いで遼州に知たり。『同書卷三十四、劉渙傳』）

右はいずれも仁宗の治世下、官妓と昵懇になつた官僚が彈劾・左遷されたことを述べている。やや時代は下るが、次のような記事も見いだされる。

○宋時閩帥郡守等官、雖得以官妓歌舞佐酒、然不得私侍枕席。熙寧中、祖無擇知杭州、坐與官妓薛希濤通、爲王安石所執。希濤榜笞至死、不肯承伏。想唐制亦然也（宋の時閩帥（官中）・郡守等の官は、官妓の歌舞を以て酒を佐くるを得と雖も、然れども私に枕席に侍せしむるを得ず。熙寧中（一〇六八～七七）、祖無擇杭州に知たりしとき、官妓薛希濤と通ずるに坐し、王安石の執ふる所と爲る。希濤榜笞せられて死に至るも、肯て承伏せず。想ふに唐の制にても亦た然るなり。』（明・田汝成『西湖遊覽志餘』卷二十一（委巷叢談））

こうして見ると、柳永の詞に見られる女性像が士大夫的價值觀に馴染み得ないことは歴然としてゐる。それに更に拍車をかけた事情として、仁宗朝以降、政府高官・理學者らを中心に、女權の抑壓が屢々主張され、これが北宋・南宋を通じて漸次強化されて行つたことを指摘すべきである。そうした流れの中にあつて、柳永の艶詞への評價が逆る道筋はもはや明らかである。士大夫の側に立つ者にとって、そこに盛られた内容が、女性の自我覺醒に同調し、女權の擴大を煽るようなものであるだけに、それらが市民社會で喝采を博し、流行すればするほど、それは自分たちの地位を脅かす危険なもの、排除すべきもの

として映じたと推察されよう。柳永の體詞がその後つねに「俗」との非難を被り續ける背景には、士大夫社會と市民社會の間の、このような價值觀の相違も、動因として働いていたと考えられるのである。

三 柳永の詞における「夜」

(1) 柳詞に見える夜の情景とその先例
夜を舞臺とした柳永の詞には、韻文史の中での前例に乏しいユニークな作がある。まず、その例を一首舉げてみよう。

063 鳳棲梧 其三

蜀錦地衣絲步障。錦的地衣。絹の步障をしつらえたあの部屋へ

屈曲回廊。曲りくねった回廊をたどつて

靜夜閒尋訪。靜かな夜 そつと訪ねてゆく

玉砌雕闌新月上。玉砌 彫闌に月の光のさしそめる中

朱扉半掩人相望。朱の扉をかすかに開いて 彼女は待っていた

旋暖熏鑪溫斗帳。やがて熏鑪に火が入り 斗帳の中は温まる

玉樹瓊枝。珊瑚の飾りは

迤邐相偎傍。枝がうねうねと絡み合っている

酒力漸濃春思蕩。酔うほどにつる戀心

鴛鴦繡被飄紅浪。鴛鴦模様の被は 紅の浪がゆれているよう

或る夜の逢引のいきさつを詠じた作。前闕では男が女の居室に辿りつくまでを、後闕ではその後の兩人の親密さを、時間の経過を辿り、比喻を交えつつ描いている。後闕はいわゆる「合歡」の情景に類するものであり、その限りでは『香奩集』や『花間集』等にも少なからぬ類例を見いだすことができる。が、作品全體の構成法——夜間の逢引の

成行きを、時間の経過を追って描き出す手法は、先行の詩詞には非常に稀にしか見られない。宋以前の夜の詩は、眠るべき夜という時間、何らかの悩みのため眠れないことを嘆き、その悩みの内容を吐露するものが壓倒的に多い。そのような中で僅かに目を引くのは、晚唐、韓偓の撰と伝えられる『香奩集』巻一に収める二首である。うち一首を挙げよう。

倚醉

倚醉無端尋舊約。醉に倚りて端無くも舊約を尋ね

却憐惆悵轉難勝。却つて憐む 惆悵の轉た勝へ難きを

靜中樓閣深春雨。靜中の樓閣 深春雨の雨

遠處簾櫳半夜燈。遠處の簾櫳 半夜の燈

抱柱立時風細細。柱を抱きて立つ時 風細細たり

邊廊行處思騰騰。廊を遡りて行く處 思ひ騰騰たり

分明窓下聞裁翦。分明に 窓下に裁翦を聞き

敲遍闌干喚不應。闌干を敲き遍くして 喚べども應へず

或る春の夜、酔いに任せて舊知の女性（おそらくは妓女）の許へしりんで行くことを、七言律詩の形式で詠ずる。首聯は導入、領聯は目指す屋敷（妓館）の遠景を、頸聯は屋敷の渡り廊下に行く心境をのべ、尾聯に至つていよいよ相手の部屋に合圖を送る……と、詩はストーリー的な展開を見せる。この手法は以後、五代の詞のごく一部に受け継がれるものの、韻文史の中で一般化されたとは言いがたい。そしてこの韓偓の詩を前掲の柳詞と比較すると、やはりこのような、言語の詩的イメージ、ニュアンスよりもストーリー展開の妙味に重點が置かれた内容は、均齊美・對偶性を特色とする律詩より、口誦性を重視する詞の方に一層適していると察せられる。兩者の内容は共に、讀者に對し、

作中人物の境遇や事件の背景・前後關係への思いを驅り立てさせずにおかない性格をもつ。それはそのような構想がこれらの作品の根柢に存在するからであり、それを小説的(故事的)構想と稱して差支えないであろう。しかしながら韓偓の詩では、形式上の規則として中間二聯に對句を並置せざるを得ないこともあり、事の推移を逐一述べるというよりは、その中の印象的な場面を斷續的に綴つたという感を否めない。その點、(内容と形式の一體化)がより良く實現されているのは柳詞においてであると言えよう。

それでは、柳永はここでなぜ詞という様式に小説的構想を導入したのであるうか。またそれは詞にとってどのような意味があつたのであるうか。

(2) 同時代の詩詞との比較

ここでもう一つ注意したいのは、柳永とはほぼ同時期に、やはり慢詞に手を染めた張先(九九〇〜一〇七八)の作に見られる夜の情景が、柳永と全く質を異にしている事實である。

076 天仙子 (後園のみ)

沙上竝禽池上暝、砂上に宿るつがい、の鳥、池のほとりは闇の中

雲破月來花弄影、雲間から月の光がこぼれ、花は影と共にゆれる

重重簾幕密遮燈、いくえにも重ねた簾幕は、あかりが外にもれるのを遮っている

風不定、風は吹きやまず

人初靜、人はそろそろ眠りにつく

明日落紅應滿徑、あすの朝は、赤い花びらがこみち、一面に散りしいているだろう

逝く春を惜む心境を述べた前関を受けて、晩春の夜の閑雅な情景を

柳永の詞風と北宋都市生活

描いている。柳詞との相違は瞭然たるものがあろう。³⁾これはむしろ北宋期の詩における夜景描寫、たとえば邵雍(一〇一〜一〇七七)の五絶「清夜吟」(月到天心處)、王安石(一〇一〜一〇八六)の七絶「夜直」(金爐香盡漏聲殘)、蘇軾(一〇三六〜一一〇一)の七絶「春夜」(春宵一刻直千金)に近似し、夜の或る瞬間の美、晝と異なる獨特の雰圍氣を捉えることが主眼となっている。それは柳永の作のように、夜という時間帶を舞臺として、その中で生起する事件、人間模様を描き出す作風とは根本的に次元を異にしていると言わざるを得ない。そして、〈夜〉の表現について、同時代の詩詞の中で柳永のみ孤立した作風を示している理由は、やはり作詞活動・作品成立の背景・環境に求められるように思われる。すなわち、北宋中期、仁宗朝に至って坊市制の崩壊が決定的になり、市民の夜間外出が自由になって、都市における〈夜〉の意味が變化したこと、及び、當時の詩人(詞人)の中でその變化に最も密着したところで創作を行っていたのがほかならぬ柳永であったこと——ここに問題の鍵があると考えられる。柳永の夜の詞は、當時の都市の夜の新たな生活形態を敏感に反映する形で出現したのではなからうか。

(3) 北宋都市における夜と〈通俗類書〉

坊市制崩壊後の北宋都市は、夜間も晝と同様に活動した。⁴⁾夜市と稱する夜間營業の市が盛行し、飲食店・演藝場も賑わった。

○夜市直至三更盡、纔五更又復開張。如要開去處、通曉不絕(夜市は直ちに三更(午前零時ごろ)に至って盡き、纔かに五更(午前四時ごろ)にして又復た開張す。如要開がしき去處なれば、通曉絶えず)。

『東京夢華錄』卷三(馬行街鋪席)

○大抵諸酒肆瓦市、不以風雨寒暑、白晝通夜、駢闐如此(大抵諸

ゝの酒肆・瓦市（繁華街の妓樓や演藝場）は風雨・寒暑を以てせず、白晝・通夜、駢闐此の如し。（同書卷二「酒樓」）

當時の市民層がこうした夜の都會生活に馴染んでいたとすれば、彼らを楽しむとして語られる講唱文藝の中の夜のイメージもまた、當然彼らの好尚・興味に應ずるものとならざるを得なかった筈であり、それはさらに柳永の詞にも影響したであろう。その點、宋代の〈通俗類書〉と目せられる『青瑣高議』『綠窗新話』『醉翁談錄』の中に、柳詞の夜の情景に相通ずる場面が多數發見されることは、見逃すことができない。それらの内容はほぼ次の二種に概括することができる。

① 戀の冒險を實行に移す時としての〈夜〉——前々から思い合ひながら何らかの障礙によって隔てられていた男女が、夜陰に紛れて逢瀬を實現する（『青瑣高議』別集卷一「西池春遊」、同・別集卷四「張浩」、『綠窗新話』卷上「楊生私通孫玉娘」、『華春娘通徐君亮』、『越娘因詩句動心』、『陳吉私犯熊小娘』、『醉翁談錄』甲集卷二「張氏夜奔呂星哥」、同・乙集卷一「靜女私通陳彥臣」等）。

○兩情感動、眼約心期。時七夕、玉娘路鄰婦、以詩與曼卿。……曼卿得詩、喜不自勝、許以十五夜爲約。……須臾、曼卿自西牆攀枝而下。慌忙迎入室（兩情感動し、眼に約し心に期す。時に七夕、玉娘鄰婦に路し、詩を以て曼卿に與ふ。曼卿詩を得て喜び自ら勝へず、許すに十五夜を以て約と爲す。……須臾にして、曼卿西牆より枝を攀ちて下る。慌忙として迎へて室に入らしむ）。（『楊生私通孫玉娘』）

② 思いがけない出逢ひの可能性を秘めた時としての〈夜〉——佳き異性との偶然的邂逅のチャンスを与えてくれる、期待に充ちた時としての夜が描かれる（『青瑣高議』後集卷四「韻球記」、『綠窗新話』卷上「劉卿遇康星廟女」、『何會娘通張彥卿』、『江致和喜到蓬宮』、『醉翁談

錄』壬集卷一「紅綃密約、張生負李氏娘」等）。

○京師貴官子張生、因元宵遊乾明寺、忽於佛殿前拾得紅綃帕子。裏一番囊、異香芬馥。生愛賞久之、於帕子上有細書、字體柔軟、誠女子之書（京師の貴官の子張生、元宵に因りて乾明寺に遊び、忽ち佛殿の前に於て紅綃の帕子を拾得す。一の香囊を裏み、異香芬馥たり。生愛賞すること久しうするに、帕子の上に細書有り、字體柔軟にして誠に女子の書なり）。（『紅綃密約、張生負李氏娘』）

このように、〈通俗類書〉に見える夜は休息の時間ではなく、様々なドラマが展開される波瀾に富んだ時間であり、それらは柳詞における夜と質を同じくしていると言える。これはやはり偶然とは思われないが、ここで宋以前の文言小説における夜の描かれ方にも觸れておかななくてはならない。

(4) 小説史における夜と、柳永の夜の詞の小説的構想

〈通俗類書〉の夜の情景は、實はそれらにおいて初めて出現したものではない。六朝志怪・唐代傳奇の中からも、類似的例を多く見いだすことができる。

○夜半有女子、可年十五六、姿顏服飾、天下無雙。來就生爲夫婦（夜半に女子有り、年十五六可^{なり}り、姿顏服飾は天下に雙無し。來りて生に就きて夫婦と爲る）。（『談生』——魏、文帝（？）編『列異傳』）

○其夜、安寢堂屋、以俟女來、薄暮果到。男不勝其悅、把臂曰、「宿願始伸於此」（其の夜、堂屋に安寢し、以て女の來るを俟つに、薄暮に果して到る。男其の悦びに勝へず、臂を把りて曰く、「宿願始めて此に伸ぶ」と）。（『賈胡粉女子』——南朝宋、劉義慶編『幽明錄』）

○秋夜嘉月、悵然思歸、倚門唱西烏夜飛……須臾女到。年十八九、容步顏色可憐（秋夜に月を嘉し、悵然として歸らんことを思ひ、門に倚

りて「西鳥夜飛」を唱ふ。須臾にして女到る。年は十八九、容歩顔色は憐む可し」。(清溪廟神)——梁、吳均編『續齊諧記』

○崔之東有杏花一株、攀援可踰。既望之夕、張因梯其樹而踰焉。達於西廂、則戶半開矣。崔之東に杏花一株有り、攀援して踰ゆ可し。

既望の夕、張因りて其の樹に梯して踰ゆ。西廂に達すれば則ち戸半ば開けり」。(元稹「鶯鶯傳」)

○既暝黑。象乃乘梯而登。飛烟已令重榻於下。既下、見飛烟靚粧盛服、立於庭前「既に暝黑たり。象乃ち梯に乘りて登る。飛烟は已に榻を下に重ねしむ。既に下り、飛烟の靚粧盛服して庭前に立つを見る」。

(皇甫枚「飛烟傳」)

これらを通覧して思い合されるのは、唐代傳奇に見られる詩との親近性——兩者が織り交ぜられて一つの文學世界を形づくる傾向であり、また白樂天らのグループにおいて、同一の題材を詩と傳奇とで競作する方法が試みられたことである(「長恨歌」と「長恨歌傳」、「鶯鶯歌」と「鶯鶯傳」、「李娃行」と「李娃傳」等)。後者の要因としては、韻散混合の講唱文藝の影響が指摘されているが、臆測を逞しくすれば、詩をめぐるそのような新しい環境が、先に觸れた韓偓の、小説的構想をもつ律詩の出現を促す一因になったと考えられよう。

しかし韓偓の段階では、構想の新しさはまだ様式の變革を導き出すまでには至らなかった。眞の革新は、社會環境の變化と柳永の出現を待たなくてはならなかった。前節で述べたように、五代を経て北宋に至り、夜間の都市生活が開放的・享樂的なものになると共に、小説史の中に見られる夜の情景が演藝場の「小説」人にとって恰好の、時宜を得た話柄として取り上げられたであろうことは想像に難くない。

〈志怪——傳奇——通俗類書〉と連なる系譜の中で、夜の場面に終始一貫し

た方向性が保たれているからには、柳永の時代にも同趣向の話が流布していた可能性は小さくないであろう。かつ、柳永と「小説」人の間に或る程度の親交があったであろうことは、柳永が教坊の樂師たちのために作詞を續けていたと伝えられること、當時の教坊が市井の間に設置され、演藝場との人的交流も行われていたと考えられることから、やはり蓋然性が高いと思われる。柳永は慢詞の開拓者として、従来の短篇形式(小令)とは異なる手法の必要性を自覺し、長篇の形式に一層ふさわしく、かつ享受者に飽きを生じさせない効果的な手法を種々摸索する中で「小説」の内容・手法に啓發され、その「ストーリー」を敘述する「という特性を取り入れて新しいタイプの「夜の詞」を制作したのではないだろうか。

とすれば、この「夜の詞」の場合、「小説」の影響は、單なる題材の共通性という次元を超えて、詞の發想・構想という根本的な要素にまで及んでいることになり、ここでは兩者の關係は一層注目すべき意義をもつと言えよう。

四 結 語

柳永以降、艷詞・夜の詞ともに屢々類似の作例を見いだすことができる。柳永の詞風の、士大夫的價值觀に屈しない傳播力の強さを示す一證左となつてゐる。しかし、そうした個別的な作風の踏襲ということを超えて注目し値するものは、右に見た柳永の新しい姿勢、すなわち演藝場で語られる物語世界に接近し、その内容を再呈示するような形で詞を作る手法が、やがてより一般化した形で詞壇に受け繼がれてゆく事實である。柳永の歿後間もない元豐年間(一〇七八―八五)に成立した『本事曲』(楊繪編。一名『時賢本事曲子集』)を筆頭として、宋代の詞

話類は、個々の詞にまつわる「故事」を記すことが中心となる。⁸⁾この趨勢は、詞が物語と結合することで一層の興趣をもつて迎えられ始めたことを示しており、詞という様式と物語性（故事性）との親和力が自覺されるに至った結果であると判断されよう。

そうして見ると、柳永が都市繁華街の中で開拓した新しい作詞法は、單に柳永の個性的作風であるにとどまらず、詞自體の特質に根ざす可能性の顯在化という意味をもち、詞史の上で先驅的な役割を演じたことになる。したがって、繁華街に出入りして詞を作るという柳永の姿勢を、従来のように單に自棄的・遺憾的な行爲として負の面からのみ見るのではなく、そのことが彼に詞的表現特性の發見を促し、詞にふさわしい表現の糧を提供したという點で、そこに積極的な意義を認める必要があるように思われる。

注(1) 加藤繁著「宋代に於ける都市の發達について」(『支那經濟史考證』上巻、財団法人東洋文庫、一九五二)以來、馬德程譯『宋代的商業與都市』(臺北、中國文化大學出版部、一九八五)に至るまで、この問題に關する專論は多い。詳しくは、伊原弘著「江南における都市形態の變遷」(『宋代の社會と文化』、汲古書院、一九八三)の註(一)を參照。

(2) 參照：斯波義信著『宋代商業史研究』第四章第一節(風間書房、一九六八)。

(3) 注(1)所掲「宋代に於ける都市の發達について」、および胡士璧著『話本小說概論』上冊第二章第一節(北京中華書局、一九八〇)に論證がある。

(4) 唐圭璋著「柳永事迹新證」(『文學研究』一九五七年第三期)による。なお柳永の生年に關しては他に、九八四年說、九八〇年說、九七一年說がある。詳しくは、吳熊和著『唐宋詞通論』第四章第五節(浙江古籍出版社、一九八五)を參照。

版社、一九八五)を參照。

(5) 以下、引用文の譯文は、原文が文語のものは文語譯(訓讀體)、口語的要素の強いものは口語譯によった。

(6) 鄭憲著「柳永蘇軾與詞的發展」(順先出版公司、一九八二)は、詞は初め一種の樂歌であり、賓筵別席における遣情助興の具であつたため、その風格において、①歌唱時の環境・雰囲気、②歌者の身分や話しぶりに適合することが要求された、と指摘する。

(7) それらの具體的内容については、入矢義高著「北宋の演藝」(上)(『東光』第八號、一九四九)、「同」(續完)(『日本中國學會報』第六、一九五四)、入矢義高・梅原郁譯注『東京夢華錄』(岩波書店、一九八三)に考證がある。

(8) 本稿では、南宋、耐得翁の『都城紀勝』の「瓦舍衆伎」の條などに言うところの「說話四家」の一としての「小說」を指す場合には「小説」と表記し、廣く筆記小説を意味する場合には括弧無しで表記する。參照 植田渥雄著「三言」の中の宋人小説——内容・體裁・語彙・文體からの考察」の「五 小説の名稱について」(『櫻美林大學 中國文學論叢』第十號、一九八五)。

(9) 「話本」という語を「小説」など講唱文藝の筆録本の意味に用いるのは誤用であるが、現段階ではこれに代る術語が無いため、本稿でもこの語を括弧つきで用いている。參照 増田涉著「話本」ということについて——通説(あるいは定説)への疑問」(『人文研究』第十六卷五號、一九六五)、魯迅著・丸尾常喜譯『中國小説の歴史的變遷』七二—七三ページ脚注(凱風社、一九八七)。

(10) したがって本稿では、いわゆる「話本」に收める各々の話の成立年代についての考證には深く立ち入ってはいないが、「三言」に先立つ「話本」集『清平山堂話本』『熊龍峯四種小説』に見えない話を觀察の対象から除くと共に、『京本通俗小説』についても、「話本」集としては偽書

であるものの、所收作品自體の成立は古いとするのがほぼ定説である點を考慮して参照した。

- (11) 村上哲見著『宋詞研究 唐五代北宋篇』下篇第三章「下」(創文社、一九七六)、中原健二著「柳永詞について——その艶詞に關する一考察——」(『中國文學報』第二十五冊、一九七五)。また、艶詞についての專論ではないが、王起著「怎樣評價柳永的詞?」(『唐宋詞研究論文集』所收「一九六九」)、初出一九五九)、葉嘉瑩著『唐宋詞十七講』第七・八講(湖南、岳麓書社、一九八九)等にもほぼ同趣旨の言及が見られる。
- (12) 以下、詞の本文の引用は、唐圭璋編『全宋詞』(香港中華書局、一九七七)による。詞牌の上の數字は、同書の排列順に基づく作品番號である。

- (13) 徐調孚注本(香港中華書局、一九六一)による。

- (14) 江蘇古籍出版社(一九八七)。

- (15) 參照・松浦友久著「唐詩に表われた女性像と女性觀」(『中國詩歌原論』、大修館書店、一九八六)。

- (16) 僅かな例外として、『玉臺新詠』に見える次の二例を擧げることができる。

○笑時應無比 笑ふ時は應に比無かるべく

嘔時更可憐 嘔る時は更に憐む可し

(梁、沈約「六憶詩四首」其二——卷五)

○持所可爲異 持して異と爲す可き所は

長有好精神 長く好精神有るなり

(梁、簡文帝「詠美人觀畫」——卷七)

- (17) 任二北著『敦煌曲初探』第五章「與柳永詞之比較」(上海文藝出版社、一九五四)以來、しばしば指摘される。

- (18) 王重民輯『敦煌曲子詞集』(上海商務印書館、一九五〇)所收作品のうち、083「南歌子」・081「失調名」・089「失調名」・102「失調名」・107「鳳歸雲」・

柳永の詞風と北宋都市生活

112 113「洞仙歌」二首・117「破陣子」・126「拜新月」・132「喜秋天」・142 143「阿曹婆詞」二首などは、男と別れている女の心情を詠じているが、そこに表れているのはいづれも保守的な女性像である。それは、たとえば089において自分の貞節を南山の松柏に喩えたり、107において自分が「三從四德」を體得していることを誇ったりしていることに、端的に示されている(數字は同書掲載順による作品番號)。

- (19) 參照・林田愼之助著「六朝志怪小説にみえる女の愛と背信」(石川忠久編『中國文學の女性像』所收「汲古書院、一九八二」)。

- (20) 以下、六朝志怪については徐震堦選注『漢魏六朝小説選注』(香港萬里書店、一九七四)、唐代傳奇については魯迅校錄『唐宋傳奇集』(北京人民文學出版社、一九五四)を底本とした。

- (21) 『青瑣高議』は上海古籍出版社本(一九八三)、『綠窗新話』『醉翁談錄』は上海古典文學出版社本(一九五七)を底本とした。

- (22) 他に『青瑣高議』前集卷二「書仙傳」、後集卷七「溫琬」、『綠窗新話』卷上「任生娶天上書仙」「華春娘通徐君亮」「薛媛圖形寄楚材」、『醉翁談錄』乙集卷一「林叔茂私娶楚娘」「靜女私通陳彥臣」、乙集卷二「金陵眞氏有詩才」「六歲女吟詩」、丁集卷一「序平康巷陌諸曲」「鄭生詩贈趙降眞」「島仙自小有詩名」、己集卷一「梁意娘與李生詩曲引」、庚集卷一「刁氏夫人賢德」等々、この種の描寫をもつ話は多い。

- (23) 「簡貼和尚」は『古今小説』卷三十五、「勿類鴛鴦會」は『警世通言』卷三十八にも収める。

- (24) また『警世通言』卷十四。

- (25) なお、文學作品ではないが、唐、孫榮撰『北里志』(一卷)に見えるさまざまな妓女の紹介文の中に、當該妓女の辯舌や學藝の才に觸れている例が散見することは、柳永の艶詞の背景を別の面から推測させる資料として注目されよう。時代を下り、元、夏庭芝撰『青樓集』(一卷)に至ると、妓女の紹介文におけるこの種の記述は一層多くなる。

- (26) 大塚秀高著「話本と『通俗類書』——宋代小説話本へのアプローチ——」の〈六〉(『日本中國學會報』第二十八集、一九七六)、同「中國小説史への視點」6〈類書から通俗類書へ〉(日本放送出版協會、一九八七)。
- (27) 大塚秀高著「『綠窗新話』と『新話摭粹』——萬曆時代の『綠窗新話』——」の〈四〉(『日本中國學會報』第三十集、一九七八)。
- (28) 享受者にとって馴染み深い人物や物語を土臺とし、これを新たな言語・様式により再呈示するという手法は、ひろく口誦文學の常套的手法でもある。参照：清水茂著「中國戯曲小説の發展」(『語りの文學』、筑摩書房、一九八八、四三三―四四一頁)。
- (29) 参照：注(2)所掲『宋代商業史研究』第三章第二節「手工業的物質の特産化と流通」、愛宕松男著『中國陶瓷産業史』第二部「宋代瓷器産業史」(『東洋史學論集』第一卷、三一書房、一九八七)。
- (30) 参照：全漢昇著「宋代女子職業與生計」(『食貨半月刊』第一卷第九期、一九三五)。
- (31) 『世界の歴史』6「宋と元」一六三―五ページ(宮崎市定執筆、中央公論社、一九六二)。
- (32) 本書については邵之誠注『東京夢華錄注』(香港商務印書館、一九六二)を底本とし、『東京夢華錄(外四種)』(臺北、古亭書屋、一九七五)を參看した。
- (33) 本節に引く資料は、龐德新著『宋代兩京市民生活』第三章「婦女生活面面觀」の〈二〉〈四〉(香港、龍門書店、一九七四)に負うところがある。
- (34) 北京中華書局本(一九七九)による。
- (35) 北京中華書局本(一九七七)による。
- (36) 上海古籍出版社本(一九八〇)による。
- (37) 朱瑞熙著『宋代社會研究』(中州書畫社、一九八三)第八章「宋代婦女の社會地位」は、司馬光(一〇一〇―一〇八六)、張載(一〇二〇―一〇七七)、程頤(一〇三三―一〇七七)らの著述を引きつつ、①婚姻自主權、②財産繼承權、③裹足、④戴蓋頭、の四點からこの問題を論じている。
- (38) 宋以前の夜の詩の特色については、拙稿「夜の詩情」(『漢文教室』第一六六號、大修館書店、一九九〇)において略述を試みた。
- (39) ほかに「荔枝香」、108「長相思」なども、季節や舞臺背景を異にしつつ、全體として似た構成をもつ。
- (40) 注(11)所掲『宋詞研究』下篇第三章第四節「離情の詞」その三(合歡の詞)に例示され、柳詞との比較が行われている。
- (41) もう一首は「五更」と題し、やはり七言律詩である。その本文は注(38)所掲の拙稿で取り上げた。
- (42) 前蜀(一)張泌「浣溪沙」其九(晚逐香車入鳳城、南唐李煜「菩薩蠻」其二「花明月暗籠輕霧」)。なお敦煌曲子詞の中には、この系列に加えるのにふさわしい作例は見當らない。
- (43) 他に107「木蘭花」其六(龍頭舴艋吳兒競)、158「青門引」(乍暖還輕冷)の、それぞれ後関など。
- (44) 注(1)所掲の諸書を参照。
- (45) 傳奇では他に「任氏傳」「李章武傳」「崑崙奴」「虬髯客傳」等にも類似の場面がある。
- (46) 参照：内山知也著『隋唐小説研究』第四章第三節の三(a)(三五六―九ページ)、第五章第二節(五六四―五ページ)(木耳社、一九七七)。
- (47) 金文京著『中國小説選』二二―三、九十四ページ(角川書店、一九八九)。
- (48) 「教坊樂工、每得新腔、必求永爲辭、始行于世。于是聲傳一時」(「教坊の樂工は新腔を得る毎に必ず永に求めて辭を爲らしめ、始めて世に行はる。是に于て聲一時に傳はる」)。(南宋、葉夢得『石林燕語錄話』卷三)。

(49) 参照：注(7)所掲「北宋の演藝」(七)の(3)。

(50) 艶詞では黄山谷「歸田樂引」(對景還消瘦)、周邦彥「滿路花」(簾烘淚雨乾)、夜の詞では歐陽脩「踏莎行」(碧辭回廊)、周邦彥「少年遊」(并刀如水)、辛棄疾「青玉案」(東風夜放花千樹)等々。

(51) 注(4)所掲『唐宋詞通論』第五章第二節〈宋人詞話始于元豐初楊繪的《本事曲》、多數偏于紀事……〉。